

# 家族：動態分析の一視角

光 吉 利 之

家族はそれ自体に固有の属性をもち、自律的に展開するが、同時にその環境への適応と同調により、社会と文化を異にするにしたがって、さまざまに異った動態をしめしており、これらを直ちに一樣なものとして取扱うことは困難である。C. Kluckhohn は、これらの相違を(1)通文化的相違 cross-cultural (2)文化内の相違 intracultural (3)特異的相違 idiosyncratic に分類し、それを唯一の要因に帰属させる危険性を指摘しているが<sup>1)</sup>、われわれはその相違にもかかわらず、そこにさまざまな方法でからみ合っている家族の動態に関する一般的な構造原理ないしメカニズムを発見することができる。家族研究の目的は、分析と比較にもとづく一般化の過程をつうじて、かかる原理を明らかにすることであろう。

ところで、一般に家族の動態分析には、次の視角が必要であると思われる。それは、家族の社会関係を社会体系として把握するとともに、それを時間的次元における力動的過程としてとらえる視角である。本稿の目的は、第一にかかる基本的視角を明らかにする点にある。第二は、家族の発達的周期に関するものである。この動態分析に関する基本的視角にもとづいて、家族周期の相違やその相違に由来する諸現象をより体系的に理解するために、家族の周期的形態変化のメカニズムを明らかにする。また家族周期のそれぞれの段階における家族関係の特質を明らかにしうる家族周期のモデル設定を試みる。第三は、要素的家族の動態に関する問題である。この場合も、前述の動態分析に関する基本的視角から、要素的家族の動的メカニズムを明らかにする試みである。以上の分析を、主として M. Fortes を中心とする最近のイギリス社会人類学の成果を参考にしながら展開

する。

## 1

家族の社会関係を社会体系として把握する視角は、家族研究においてかなり一般化した視角である。社会体系としての家族は、それ自体限界維持的で閉鎖的であるが、多くの場合、より包括的な社会体系の下位体系として他の体系との関係を維持する開かれた体系である。ふつう、家族の動態分析は、かかる体系内および体系間に生起する相互作用の分析をつうじて行われる。

ところで、一般に所与の社会体系の内部で相互作用する個人の集合体は、その状況および体系への関係の機能によって規定される二つの分化した関係の型をあきらかにする。第一の型は外在的關係、それに対応する第二の型は内在的關係である。体系内の行為者は、その体系維持のために、このいずれかの関係において、より優越的な役割を遂行する。

人類学においても、かかる二分法的アプローチは、家族における社会関係の内在的關係としての domestic な側面ないし情緒的側面 affective aspect と外在的關係としての法的側面 jurial aspect に区別する方法にすでにあきらかにされている<sup>2)</sup>。前者は、母—子関係に典型的にみられる強固な相互的愛情関係ないし domestic な関係である。後者は、その所属する社会の社会的慣習によって正当化された権利・義務の系列によって規定される関係であり、家族の社会関係は、この側面をつうじて、その環境および全体的社会構造に統合され、また、それからさまざまな規定をうける。したがって、家族の社会関係における分化は、生殖関係および子供の哺育と扶養に固有な要求か

ら派生する domestic な内在的関係と家族に外在する領域すなわち全体社会構造から派生する法的規範への接続によって規定された外在的関係としての法的関係との分化であり、家族の成員は、このいずれかの関係においてより優越的な役割を遂行するものと理解することができる。

このように、家族の社会関係は、家族の外在的領域に接続することによって、動的な過程をふくむが、さらに、それは基本的にはこの過程に規定されつつ同時に時間的次元における過程としても動的である。したがって、家族の動態をより具体的に把握するためには、synchronic な分析視角のみでは不十分であり、家族の社会関係に関する時間的次元を考慮することが必要である。

M. Fortes は、構造を「特定の社会において一般的妥当性をもつ社会組織の原理が、時間的過程をつうじて展開することによってもたらされる諸部分の配置」であると<sup>39)</sup>するが、がら、構造分析は、特定時点で凍結した関係を前提するのではなく、ある進行中の事象から、連続的で反復的な首尾一貫していると考えられる過程を抽象することを意味している。したがって、われわれは、その関係の中に時間的連続、「前」「後」の標準によって規定された諸要素の関係を析出することができる。これは、いわば体系に潜在的な時間的次元であるが、このような意味で、その時間的次元において生起する行為の sequence は無視しえない。

しかし、社会構造における時間的次元は、次の点でさらに顕在的状况を構成する<sup>40)</sup>。それは基本的には吸収 intake・循環 circulation のメカニズムによって構成された役割・関係・集団への成員補充の問題であるが、ここで補充の問題は単なる成員の補充のみではなくて、役割と諸関係の再配分、排除、交替の過程をも意味する。というのは役割には、その譲渡に関する行為者の期待、つまり譲渡期待を特徴とするものがある。この役割類型に補充的な役割は developing role である。つまり、ある場合に、人は役割維持を意図してその役割を遂行するが、他の場合には、その役割が譲渡され、交換されるためにそれを遂行するよう期待される。この場合、行為者は、その役割および

関係が特定の期間で終ることを予想している。したがって、これはほんらい self-liquidating な性格をもつ。多くの社会関係はこのために非連続で不安定な性格を付与される。しかし、譲渡され、交換された役割と関係は同一のコンフィギュレーションを再生産しつつ持続する。このように、一般に社会関係は動的属性を持ち、その内部に役割と関係の再配分・排除・交替に伴伴する内部的な推移と波動的な過程をふくむ。

このことが家族の社会関係にも妥当するものとすれば、家族の時間的次元における過程は、家族成員の役割（制度化のレベルでは権利・義務の系列）の再配分・排除・交替の過程と理解することができる。ただし、家族におけるこの時間的過程の特徴は、incest taboo に集中的に表現されるように、第一に世代的基軸にそって（条件によっては世代間で）展開される。したがって、子供の成長の過程は、両親の世代に配当された役割の漸次的取得の過程であり、それからの両親の世代の排除、交替の過程である。第二に、この役割再配分の過程は、周期的に展開する。それは、生物有機体の成長周期に比較することができる。ユニットとしての家族集団は、原単位の分解と同一の種類の単位による交替の周期的過程をつうじて、その形態および構造を維持・存続させるが、その成員の地位・役割は、再配分・排除・交替の一連の規則的、周期的変化を展開する。したがって、家族の動態分析には、前述の家族の社会関係における二つの関係の型の分化＝役割分化とその時間的次元における再配分過程への視角が必要であると思われる。以下かかる基本的視角にもとづいて、家族の動態分析を行なう。

## 2

第一は、家族の発達の周期に関する問題である。一般に家族の社会過程は、形成―解体の過程としてとらえられるが、家族は、この過程をつうじて一連の段階を経過し、各段階に対応して、家族構成、経済活動、社会活動などの点で周期的変化をしめす。このように、家族の動態をその生活周期の視角から分析する方法は、形成、膨張、縮

少、消滅という生活周期を不可避的にもつ一代家族についてまず上げられ、ことにアメリカ農村社会学のこの領域に対する功献はみるべきものがあった。しかし、Loomis も指摘するように、この場合のモデルは、夫婦とその子供をふくむ二世以上には拡大しない核的家族とされ、その他の家族形態についての周期的変化は除外された<sup>5)</sup>。したがって、アメリカ農村社会学の家族周期理論はこの点に限界があり、このモデルをそのままただちに通文化的比較分析に適用することはできない。そこで、かかる周期的発達の相違やその相違に由来する諸現象をより体系的に理解しようとすると通文化的比較分析を可能ならしめる一般的構造原理ないし概念的枠組を明らかにすることが必要である。それは、家族の周期的形態変化の原理ないしメカニズムの問題である。ここでは、まず前述の家族動態に関する基本的視角にもとずいて、このような性格をもった概念的枠組をあきらかにしたい。

さて一般に二世家族と三世家族の形態の相違は、周期的段階の相違と考えることができよう。また、婚姻年令に達した子供をもつ家族と未成年の子供をもつ家族の場合も同様である。この意味で、家族の周期的要因は家族形態にとって固有の属性であり、この過程は無視し得ない。

たとえば、居住形式はこの点をより明瞭に示す。家族関係は、ほんらい地縁と無関係なものであるが、常に地縁を媒介にして実現される。したがって、居住形式は家族の内的構造の外枠＝家族形態の基本的指標であると考えられることができるが、この場合にも、特定の社会の居住形式を synchronic な分析にもとずいて分類する従来の人類学における二者択一的方法的方法的欠陥は、すでに明らかにされている。たとえば、Goodenough は、二人の調査者が、同一のセンサスを利用しながら、同一の社会の居住形式について全く矛盾した類型化を行った点を指摘し、それが両者の発達の周期の無視に起因する点を明らかにしている<sup>6)</sup>。事実、一つの社会に数個のタイプの居住形式が共存するのを発見することは容易であろう。たとえば、新居制 neolocal residence、父方居住制

patrilocal residence、母方居住制 matrilocal residence 等々。しかし、これらの各タイプがその社会に一般的な単一の居住形式の発達の周期における一局面であることが明らかにされれば、その混乱は避けることができる。このように、一般に、家族類型論ないし家族形態の分析にとって、その周期的変化への視角は不可欠であるといえよう。

ところで、家族は固有の属性として周期的変化をとげるが、われわれは一定の pointer events<sup>7)</sup> の出現期を画期として、それにある段階を画することができる。一般に子の出生、子の結婚、両親の死亡などは、あらゆる家族に潜在する周期的発達の決定的な画期であり、その出現期は概念的にモデル化することができる。勿論これのみが唯一の重要な転換点ではない。その他分家、隠居等々も同様に考慮されねばならないが、われわれはこの pointer events を画期として、家族の周期段階をつぎの三段階に区分することができる<sup>8)</sup>。

第一期。拡大期。男女の結婚から再生産家族の完成で終る成員補充の過程。この段階での生物学的規定因子は、妻の出産力の持続であるが、構造的には、子供が情緒的・法的関係において、両親に全面的に依存する期間である。

第二期。分散ないし分裂期。この段階は長子の結婚からはじまり、全子の結婚まで持続する期間である。

第三期。交替期。この段階はふつう末子の結婚からはじまり、両親の死で終る。同時に、子の世代の再生産家族による親の世代の排除と交替の過程である。

この周期段階は、あらゆる社会に適用しうるが、現実には、社会と文化を異にするにしたがってさまざまな相違をしめすため、若干の変更が必要とされる。たとえば、周期的要因のなかでもことに重要と思われる結婚についてみよう。結婚は、家族の発達の周期の脈絡では、家族関係における地位と役割の変化に対応して、夫婦の出生家族からの一方または双方の分裂を意味している。しかし、分裂の方法と方向性は社会によって異なる。たとえば、アメリカの一代家族においては、

全子が婚出し (neolocal), 周期の第三期における夫婦の一方あるいは双方の死亡によって家族は消滅する。これに対して、たとえば、ボルネオの Iban 族では<sup>9)</sup>、夫婦の結婚後の居住形式は、妻方居住制 uxorilocal か夫方居住制 virilocal のいずれかをとる。出生家族の家族形態は婚姻にもとづく分裂によって変化するが、夫婦いずれが移動するかは結婚時点における家族の周期的発達段階に対応している。ここでは、兄弟のうちで年上の場合には性にかかわりなく他出し、最後に残されたものが残留し、父を相続するため、その家族形態および周期は、アメリカの一代家族とは異った複雑さを示している。

このように、家族の周期段階の相違は、主として、その成員の出生家族からの分裂の方法および方向によって規定されるものと理解することができよう。すなわち、特定の社会における家族形態の周期的変化の特質は、家族の周期的分裂過程の原理を明確にすることによって明らかにしうる。したがって、この分裂過程に作用する規定因子を明らかにすることによって、家族形態の周期的変化のメカニズムを解明することができる。

ここでわれわれは、二つの規定因子を想定することができる。第一は主として家族の domestic な社会関係における要因である。それは、他の社会集団と区別される家族の特殊性、すなわち、生物学的事実に関係する。生物学的法則は、子供が死亡しない限り、その成長を保証するが、少なくとも肉体的成熟のためには15年、さらに社会的成熟のためにはそれ以上の最小限の時間を必要とする。この子供の哺育と養育の事実によって、家族成員に課せられる基本的な役割が、家族の分裂過程に作用する基本的要因となる。

第二の要因は、主として家族の社会関係の法的側面における要因である。そして、家族の周期的発達の相違は、主としてこの側面よりもたらされる。前述のように家族の社会過程における周期的変化は、地位・役割の再分配過程である。そしてこの過程におけるもっとも劇的な要因は結婚（その他死亡・隠居・分家等々も同様である）であろう。それは、とくに、家族の社会関係の法的

側面における変化としてあらわれる。すなわち、結婚によって夫婦の法的地位における変化とそれに伴う家産に対する諸権利の再分配がなされ、基本的にはかかる変化に規定されつつ、その空間的配列における変化、すなわち出生家族からの分裂一家族形態の変化が実現する。このように、家族の分裂過程は、基本的には地位および役割の再分配の方法と方向に規定される。とりわけ、家族が社会的再生産の単位として、一つの生活共同体を構成する点からみて、家産ないし生産・再生産手段の管理と利用および法的地位（＝権威と監督権）に対する諸権利は、家族の周期的発達においてとくに重要な要因であろう。この意味で、一般に、子供の成長の過程は、両親の世代の生産・再生産手段に対する権利の漸次的取得の過程として、また、それからの両親の世代の排除と交替の過程と理解しうる。したがって、一般に、家族の社会関係の法的側面における家産および法的地位に対する諸権利が、相続と継承によって、どのような方法で、どの成員に配置されるかが、家族の周期的形態変化を規定する主たる（そのみではないが）要因であると考えられるであろう。

ところで、この過程は家族の社会関係の法的側面における過程である。したがって、ここで家族の外在的領域との相互作用のメカニズムが明らかにされねばならない。この相互作用は一定の媒体を媒介として展開する。すなわちこの過程は、全体社会から派生した固有の政治的・法的・宗教的諸制度ないし諸慣行に媒介されることによって、さらに複雑なメカニズムを持つ。親族体系とりわけ descent rule は重要である。すでに Radcliffe-Brown の法的地位および家産に対する諸権利の譲渡の方法と単系親族集団 unilineal descent group との関係に関する古典的な分析があるが<sup>10)</sup>、人類学の多くの成果は、家族構造が親族体系とくに descent rule によって規定されつつ、その一環を構成すること、家族構造の問題は、親族体系と相即させつつ論じられる必要のあることを明らかにしている<sup>11)</sup>。ことに Goody の最近の報告は、それを家族構成との関連で分析した点で

参考になる<sup>12)</sup>。

彼は、同一の農業体系と家計パターンを持つ西アフリカ、ゴールド・コーストの LoDagaba 族と Lowilli 族について「統制実験」的比較分析を行った結果、descent rule の相違によって生ずる家族の分裂の方法と方向の差異を明らかにした。LoDagaba では、法的地位および生産手段に対する諸権利が matrilineal norm にしたがって維持・継承され、Lowilli では、patrilineal norm にしたがっている。そこで、LoDagaba では、父の財産および地位は、父の死後すべて父の姉妹の子の所有となり、妻子は、父一夫の遺産に対して相続権を持たないため、息子は周期段階のより初期に分裂し自立する傾向が強く、そのため男系親族の同居形態が少なく、家族構成もより小規模になる点を明らかにしたが、このように、親族体系、とくに descent rule は、家族構造との関連で、通文化的分析の重要な変数であると考えることができる。したがって、家族の動態は、基本的には家族の内在的関係としての domestic な関係における自律的展開であるが、同時に、その外在的関係としての法的関係において、全体社会と諸制度、諸慣習（とくに親族体系）を媒介に接続し、相互作用することによって生起する運動であると理解しうるであろう。

このように、われわれは、家族の周期的形態変化のメカニズムを、家族の社会関係の domestic な関係と法的関係への分化およびそこにおける諸役割の再分配過程としてとらえる基本的視角から、それを法的地位および家産の継承と相続に対する諸権利の再分配過程として把握し、親族体系の脈絡でこれを追求することによって、さまざまな社会の家族動態をより体系的に理解しうる手掛りをうることができる。また同時に、このような視点から家族構造を分析することによって、時間的次元を無視した家族類型論の危険性をも回避することができるであろう。

ところで、家族の動態を以上のように理解する意義は、この点にとどまらない。さらにわれわれは、前述の基本的視角にもとづいて役割分化を基準とする家族周期に関するモデルを設定すること

ができる。このモデルは、家族の社会関係における役割の再分配過程に対応して、家族関係に変化が生じ、家族周期の各段階において統合—分解過程が周期的に出現し、各段階に特有の社会関係が発生することを明らかにするものである。

すでに述べたように、家族の周期段階は概念的に第一期＝拡大期、第二期＝分裂期、第三期＝交替期の三期に区分することができる。この周期段階は、またその発達の各段階におけるそれぞれの家族成員の役割ないし権利・義務の再分配と排除・交替の過程をも示すものである。それぞれの段階は、相対的に完結性を示し、前段階における役割分化にもとづく統合を基礎としつつ、次の段階の新しい状況に応じて成員の役割の再分配が行なわれ、次の段階に進むことを明らかにしているが、さらにわれわれはこの周期段階に個人の生活周期 life cycle の脈絡を加味することによって、家族の社会関係に関するより完全なモデルを作成することができる。

Malinowski は Freud の精神分析学の成果を参考にしながら、生理・心理学的基準にもとづいて、子供の人格の発達段階を以下のように四期に区分した<sup>13)</sup>。

第一期＝乳児期 infancy

第二期＝幼児期 babyhood

第三期＝児童期 childhood

第四期＝青年期 adolescence

このそれぞれの段階で、子供はその基本的な生理・心理学的要求と能力の発達に応じて親子間の異なる関係をつぎつぎと展開し、それに対応する諸活動を示すが、前述のように家族の社会関係に構造的に分化した二つの関係（domestic な関係と法的関係）が同時に子供の生活周期の枠組を構成するものと考えられるわれわれの立場からみれば、子供の心理・生理的発達はむしろ二義的であろう。

そこで、この視点から、われわれは子供の出生から法的関係において成人期に至るまでに次のような四段階を設定することができる<sup>14)</sup>。

第一期、乳児期。子供が母中心的核に含まれる時期。事実上母—子—一体期であり、社会的、情緒的、生理的に母の付加物である。子供

は、母をつうじて社会に関係する。

第二期、幼児期。子供は、父中心の核的家族に受入れられ、父は、夫—父の地位において母—子のユニットにさまざまな義務を持つ。

第三期、児童期。子供は、この段階で家族の domestic な関係に入る。同時に家長（両親か、他の成員である場合もある）の法的な保護下におかれる。この段階は、児童期プロパーの段階であり、この全期間をつうじて子供は土地その他の財産に対する自立的な権利を付与されず、法的地位も持たない。

第四期、成人期。子供は、法的な権利、義務関係に入る。この段階で子供は生産手段の管理権および法的地位について、事実上のまたは潜在的な自律性を付与される。この段階の頂点は結婚とそれに随伴する出生家族からの分裂である。

ところで、これらの諸段階は、それぞれ相対的閉鎖性を持っている。それ故、前の段階より次の段階への移行にさいしては、役割体系の再分配にともなう急激な re-orientation が要求される。このために、この移行期には、成長する子供をめぐっての危機的状況が常に潜在していると考えなければならない。したがって、それぞれの移行期には、各段階を正当化するための制度化された手続きが発生する。通過儀礼 *rite de passage* は、この文脈で把えることによって意味を持つてくる。これは、個人の成長にともなう重要な折目ごとに行なわれるもので、成長過程における過渡期の危機を克服し、無事に次の段階に移行するための転機を意味する。とくに次の段階における位地が一層重要な場合には、通過儀礼はその変化の重要性をさらに強調する<sup>15)</sup>。第三期より第四期への過渡期は、domestic な領域から法的領域への移行期であり、そのもっとも顕著な段階であろう。このように家族の社会関係には、子供をめぐっての周期的危機が常に潜在するといえよう。

以上の個人の生活周期を家族周期の三段階の脈絡でとらえることによって、家族の社会関係に関して次のような一般的周期段階を想定することが

できる。

第一期。母中心の核に含まれる子供をもつ家族。

第二期。父中心の核的家族に含まれる子供を持つ家族。

第三期。domestic な関係に入る子供を持つ家族。

第四期。子供が法的権利・義務関係に入り、漸次自己の family of procreation を形成してゆく家族。

第五期。交替期の家族<sup>16)</sup>。

この周期段階は、若干の変更を加えれば、あらゆる社会に適用することができる。つまり家族の社会関係は、その分裂の方法と方向によって規定された周期的形態変化の相違に応じて、この周期段階がさまざまな仕方で複合したものとして理解することができる。

以上のように、われわれは、家族分析の動的視点から家族の発達の周期を分析することによって、家族形態の周期的変化に関するメカニズムを明らかにし、家族周期の通文化的比較分析を行なうために必要な手掛りをうることができた。さらに、家族における発達の周期の段階を役割の再分配過程として把握することによって、家族周期のそれぞれの段階における家族関係の特質を明らかにした。このことによって、家族の動態に関するより体系的な理解が可能になるであろう。

### 3

第二は、要素的家族の動態に関する問題である。一般に家族の要素的形態すなわち家族としての条件を充足する最小の単位は、通常夫婦とその子達の同居からなる核的家族 nuclear family ないし要素的家族 elementary family とみなされる。ところで Murdock の述べるように核的家族は「常にそれ自体で単独に存在するにせよ、また、それがさらに複雑な形態をもつ複合家族に吸収されているにせよ、あらゆる社会で明確に識別しうる強固な機能集団として存在する<sup>17)</sup>」が、このことは、必ずしも核的家族が夫婦とその子達によって構成される固定的な細胞ないし、“building block”であることを意味するものでは

ない。このような立場から、われわれは核的家族における家族関係、すなわち夫婦関係と親子関係を前述の家族動態分析の基本的視角から、より拡大された次元における現象として検討することによって、要素的家族に固有の力動的な構造原理を明らかにすることができると思われる。

このためには、R. Smith のニグロ家族に関するモノグラフ<sup>18)</sup>が参考になる。まず、われわれはこのモノグラフから、前述の基本的視角にもとずいて、ニグロ家族の遂行する機能的側面を析出し、その周期的発達各段階における成員の諸関係のさまざまなコンステレーションの変化を明確にし、その家族形態と人間関係の変化を家族の外在的領域との関連で分析することにより、その動態的特質を明らかにする。

ニグロ家族の動態は次の点を明らかにしている。第一に、その周期の第一段階におけるノーマルな居住形態は要素的家族形態である。この段階では、女性は妻として男性への依存関係に入る。この期間、夫一父としての役割は住居の維持、母一子に対する経済的扶養にあり、このことによって夫一父の権威と統制力は維持される。女性が家庭的な領域にその活動を限定され、子の哺育と養育に専心するのはこの期間に限定され、この時期にのみ母一子は夫の扶養を全面的にうける<sup>19)</sup>。またかなり明確な役割分化もみとめうる<sup>20)</sup>。夫一父としての地位は家長としての権威に明確にされている。女性は、同様にその配偶者としての明確な地位と役割をもち、その夫の役割に補完的であり、下位である。また、子供もこの段階には両親の権威に従属する<sup>21)</sup>。しかしこの段階においても、夫はかなりの期間プランテーション農場に出稼ぎをするため、家族の日常的領域における活動は重要性をもたない<sup>22)</sup>。

第二に周期の第二段階は、妻=母が子供の養育から解放される時点から開始される。この段階は、形態変化と同時に家族の人間関係における顕著な変化を示す。形態的には、要素的家族形態は、一般に母一子家族（母と一人ないしそれ以上の子からなる世帯）に変化する。ここでシステム内部の地位と役割の再分配がなされ夫一父に対する母

一子結合がより強化され、母一妻は母としての地位を明確にすることによって、家族の内部的な権威とリーダーシップを獲得するとともにその法的地位を強化し、家族の外在的領域に漸次接続する<sup>23)</sup>。

以上の要約によって、ニグロ家族の社会関係には、matri-focal な特質がみとめられ、同時にそれは夫一父の地位に相関することが明らかになったが、なに故、夫一父の役割が家族関係において未梢的になるかが問題である。それはニグロ家族のもつ親族体系の特質と全体社会構造における階層体系に占める男性の役割の問題に関連する。

ここにおける status system の特徴は以下のようである。

(1) colour value のスケールが存在する。白人およびヨーロッパ人の混血が positive value、黒人ないしニグロ混血が negative value。これが地位規定の基本的要因である。

(2) 経済的、職業的体系における地位。これによって若干名はカラーにもとづく ascribed status 以上の地位を獲得するが、この場合も人種的構成が基本的要因である。

(3) 村落内の地位分化は認められない。もっとも非階層的な分化（分節 segmentation）はみとめうるが階層分化はない。

(4) 親族組織は両系制で要素的家族が比較的孤立化する点まで狭小化されている。したがって status ascription の準拠点は、むしろそのもっとも拡大した親族集団である人種的集団そのものと考えられる。したがって親族組織は重要性をもたない<sup>24)</sup>。

このように、ニグロ家族における男性の地位はすでにカラーによって規定され、そのため職業体系における地位は家族の社会的地位の規定要因にはならない。また家産ないし法的地位の相続・継承は父のみを媒介としない。それ故、子供は父一子関係の設定にもとずいて特定集団のメンバーシップを獲得するのではなく、この側面でも男性は他の家族員に対する地位付与的機能をもたない。したがって、ここでの婚姻結合の脆弱性と matri-focal な家族関係の特質は、母一子に対する父一

夫の法的地位が比較的重要ではない点に由来するものと予想される。

そこで、この点をより明確にするために若干の比較分析が必要である。一般に母一子関係はあらゆる社会で基本的である。強固な父系制への傾斜を示す社会においても、その子は母への一心同体感 *flesh and blood* をもつ<sup>25)</sup>。したがって、問題の提出は以下の仕方になされることによって意味をもつ。第一に成人男子の役割が家族構造に統合される方法。第二に母一子関係が男子の役割構造をも含む一般的構造に適合するように構造化される方法。前述のように、この役割と諸関係の家族の内部構造における分化と配置は、一方では生殖関係および子供の哺育と扶養の要求に規定されるが、他方外在的要因としての親族体系に固有の法的規範により規定される。

一般に親族体系が社会構造における分化の基礎的要因をなす社会では、権威および権力は、父系制・母系制をとわず家産と法的地位に対する権利にもとずき成人男子に付与される。しかしそれが親族組織において、いかなる地位を占めるものに割当てられるかは、その社会の親族体系とりわけ *descent rule* の特質によって異なる<sup>26)</sup>。

1) 厳密な父系制親族体系をもつ Tallensi の場合<sup>27)</sup>。ここでは家族における父一夫の地位は明確である。彼の家産に対する所有権は、その地位を維持する限り固定している。また、妻の生殖力に対しても明確な権利をもち、母一子の社会的・法的地位は、父一夫の地位を媒介に決定、維持される。父一夫は、家族の内部的な社会関係における長であるとともにその資格にもとずき政治的体系における地位も確立する。

2) 極端な母系制親族体系をもつ Nayar の場合<sup>28)</sup>。女子はその *matri-lineage* の複合家族 (Taravad) に居住、性的交渉をもつ愛人=夫の訪問を受ける。その子は母と共に彼女の Taravad に居住、その集団の長老男子 (母の兄弟、母の母の兄弟など) の支配下に入る。子の Taravad のアウトサイダーである父は、子の Taravad に対して経済的・政治的・宗教的機能を一切所有しない。しかし男子は、自己の Taravad において

強固な経済的・政治的地位と宗教的機能をもつ。Nayar の場合、父一夫の地位がその極限にまで縮小されるのは、自己の Taravad における男子の役割が高度に強化され、女子と子に対する男子の扶養的役割がその Taravad の構造に反映しているからであろう。

3) 現代ヨーロッパ家族の場合。その親族体系の基本的特質は両系的親族体系と核的家族の析出を特質とする。したがって核的家族外部の親族集団は構造的集団 *structural group* ではなく、むしろ組織的集団 *organizational group* である<sup>29)</sup>。この現象は、基本的には構造的構成体としての親族組織の重要性と機能的意義の、職業体系への吸収による減退に対応する。したがって、この親族体系における諸活動は機能的に分化し、親族的役割と職業的役割は明確に区別され、職業体系における夫一父の地位付与的・生計支持的役割が、家族の地位規定の基本的要因になる。ここでは外在的規定要因は職業体系に転化する<sup>30)</sup>。

以上、抽出はかなり任意的であるが、この三つの親族組織の比較分析によっても、ニグロ家族における父一夫の地位と役割の特質は明白であろう。すなわちニグロ家族にみられる婚姻関係の脆弱性は、Nayar における母系制的系統関係の原理の存在に相関しない。ここでは、Nayar にみられる母の兄弟、母方の *lineage* は存在しないから、それはむしろ母子に対する父一夫の役割がミニマルである点に由来するものであろう。また、Tallensi にみられる父の強力な法的地位とは対照的であり、ヨーロッパ社会にみられる職業体系における父一夫の役割もここでは不明確である。したがって、ニグロ家族の *matri-focal* な家族関係および父一子関係したがって婚姻関係の相対的脆弱性は、家族の社会関係における外在的体系としての法的関係における父一夫の地位に規定されるものと考えることができる。また、その形態変化の特殊性はその結果である。

ニグロ家族の構造を、このように動的視角から検討することによって、われわれは、要素的家族の人間関係に関する一般的な動的メカニズムを明らかにすることができる。Radcliffe-Brown は、



社会構造の基本的要素が dyad (person to person) の関係に還元しうることを示唆しているが<sup>31)</sup>、これにしたがって、要素的家族の社会関係をつぎのような三組のサブ・システムに区別することができる。

1) 夫婦関係。性交にもとづく男性・女性の関係。これは婚姻関係として社会的承認をうけるまでは単なる性的関係である。

2) 母子関係。母とその子より構成される。この関係は妊娠においてはじまるが、子の出生までは社会的重要性に乏しい。

3) 父子関係。父とその子より構成される。この関係は、性的関係ないし婚姻関係にもとずいて確立された社会関係を媒介にして識別することができる。

前述の分析から家族関係においては、婚姻関係よりもむしろ子の哺育と扶養およびその地位付与的機能により、親子関係が基本的であることを明らかにしたが、われわれは、この三組の関係の組合せによって、要素的家族の動態のメカニズムを次のように理解することができるであろう。第一は家族関係における核心的部分である。これは社会的再生産の過程において、それ以上還元し得ない要素的細胞であるが、以上の分析で明らかのように、母—子関係によって構成される。この関係は、社会的再生産の核的部分として、その時間的次元においても常に安定的である。他の二組の関係は、この核的部分を中心に、それを媒介として構成される。第二に婚姻関係、したがって父—子関係は、子供の法的地位の付与および確保・維持に効力を有する場合に、母中心的な核心部分と全体としての家族集団の重要な媒体になる。というのは、夫—父の地位は家族関係における法的関係または外在的關係を代表し、家族を全体社会に統合せしめる媒体となるからである。したがって、この関係は、家族のより大きな集合体—発生論的にはコミュニティーに接続し、その性格に依存するため基本的に不安定であり、また、その時間的次元においても常に不安定である。

このように、われわれは家族分析の動的視点より要素的家族の動態を分析することによって、その動的メカニズムを明らかにした。要素的家族の

固定化に対する批判は、すでに二、三みられるが<sup>32)</sup>、以上のようにその動態を把握することによって、たとえば、Kibbutz<sup>33)</sup> や Nayar における家族関係も、要素的家族の例外事例としてではなく、むしろ要素的家族の動的特質に由来するものと理解しうるであろう。また北アイルランド農村地域における家族構造<sup>34)</sup>も同様の説明をなしうるであろう。このようにして、われわれは、家族の人間関係に関して、より動的、分析的なアプローチの手掛りをうることができる。

註 1) C. Kluckhohn, Variations in the human family, in *The family in a democratic society*, 1949, pp. 3—11.

2) M. Fortes, The structure of unilineal descent groups, *American Anthropologist*, 1953, vol. 55, No. 1, p. 30.

3) M. Fortes, Time and social structure: An Ashanti Case study, In *Social structure*, M. Fortes. (ed.) 1949, p. 84.

4) S.F. Nadel, The theory of social structure, 1957, pp. 125—152.

5) C. P. Loomis, Studies of rural social organization in the United states, Latin America and Germany, 1945, p. 197.

6) W.H. Goodenough, Residence rules, *Southwestern Journal of Anth.* vol. 12, No. 1, 1956, pp. 822—37.

7) S. F. Nadel, The foundations of social anthropology, 1958, p. 99.

8) J. Goody (ed.), The developmental cycle in domestic groups, 1958, pp. 4—5.

9) J. D. Freeman, The family system of the Iban of Borneo, in *The developmental cycle in domestic groups*, 1958, pp. 15—52.

10) A. R. Radcliffe-Brown, Patrilineal and matrilineal succession, in *Structure and function in primitive society*, 1956, pp. 32—48.

11) なかでもとくに M. Fortes, The structure of unilineal descent groups, *American Anthropologist*, 1953. vol. 55, No. 1, pp. 17—41.

12) J. Goody, The fission of domestic groups among the LoDagaba, in *The developmental cycle in domestic groups*, J. Goody, (ed.), 1958, pp. 53—91.

13) B. Malinowski, Sex and repression in savage society, 1927, pp. 1—74.

14) J. Goody, op. cit., p. 9.

15) R. O. Blood, Jr., Marriage, 1962, p. 168. なお、彼によれば、現代生活における rite of passage には、たとえば、結婚式(これは現代的イニシエーションである)、婚約、新婚旅行

等々があるとしている。

- 16) 生活周期を手掛りにして、家族の社会関係、社会的行動を理解しようとする同様の試みは、L. K. Frank にみることができる。彼は、以下の六段階の周期段階を想定している。1. 結婚当初の子供が生まれる前の家族。2. 子供を生みはじめた家族。3. 学令前の子供を持つ家族。4. ティーン・エイヂの子供を持つ家族。5. 子供が船出するセンターとしての家族。6. 老いゆく家族。K. Frank, *Dynamics of family interaction, Marriage and family living*, 1948, vol. 10. pp. 52—53. 同様の試みは、J. H. S. Bossard にもみられる。J. H. S. Bossard & E. S. Boll, *Ritual in family living*, 1950, pp. 136—152. しかし、この段階区分の基準は、いずれもかなり便宜的である。
- 17) G. P. Murdock, *Social structure*, 1949, p. 2.
- 18) R. T. Smith, *The Negro family in British Guiana*, 1956.
- 19) *ibid*, p. 113.
- 20) *ibid*, p. 146.
- 21) *ibid*, p. 147.
- 22) *ibid*, p. 113.
- 23) *ibid*, p. 148.
- 24) *ibid*, pp. 191—220.
- 25) A. R. Radcliffe-Brown, *African systems of kinship and marriage*, 1950, p. 77.
- 26) A. R. Radcliffe-Brown, *Structure and function in primitive society*, 1956, pp. 32—48.
- 27) M. Fortes, *The Web of kinship among the Tallensi*, 1949.
- 28) E. Kathleen Gough, *Is the family universal?*, *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 1959, vol. LXXXIX, Part 1.
- 29) R. Firth, *Two studies of kinship in London*, 1956, pp. 13—14.
- 30) T. Parsons, *Family, Socialization and interaction process*, pp. 12—15.
- 31) A. R. Radcliffe-Brown, *African systems*, p. 39.
- 32) M. J. Levy, & L. A. Fallers, *The family; Some comparative considerations*, *American Anthropologist*, 1959, vol. 61, No. 4, pp. 647—651.  
L. Lancaster, *Some conceptual problems in the study of family and kin ties in the British Isles*, *The British Journal of Sociology*, 1961, vol. XII, No. 4, pp. 317—333.  
R. N. Adams, *An inquiry into the nature of the family*, in *Essays in the science of culture*, C. E. Dole and R. L. Carneiro. (ed.) 1960. pp. 30—49.
- 33) M. E. Spiro, *Is the family universal?* *American Anthropologist*, 1954, vol. 56, pp. 839—846.
- 34) J. M. Moge, *Rural life in Northern Ireland*, 1947.